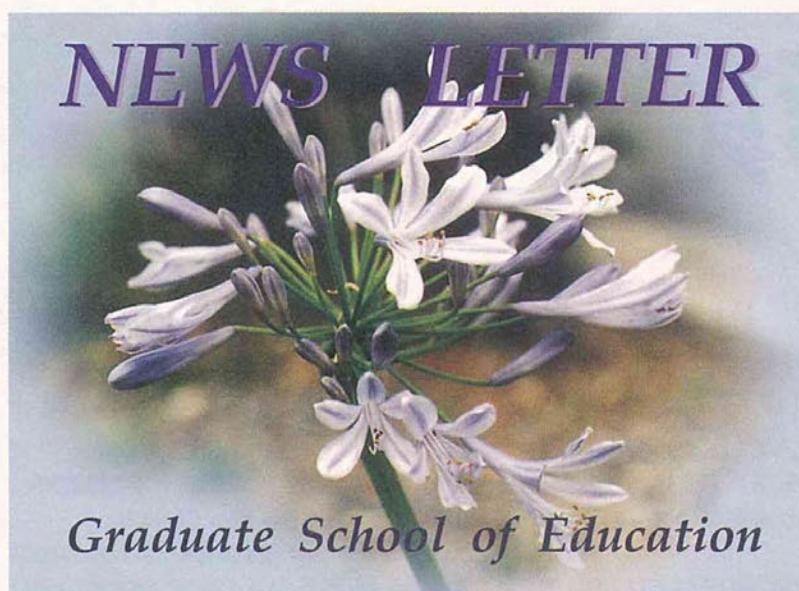


No.12



(目次)

● 卷頭言

教育学研究科と国際学術交流	研究科長 学部長	川崎良孝	2
---------------	----------	------	---

● 研究ノート

教員から	教育学講座 教授	辻本雅史	3
院生から	生涯教育講座 修士課程1年	赤上裕幸	3
院生から	臨床教育学専攻M1	大石真吾	4
● 社会人院生から	教育科学専攻 専修コースM2	森脇逸朗	4
● 学部生から	現代教育基礎学系4回生 教育心理学系4回生 相関教育システム論系3回生	山田修裕 永山智之 田中淳也	5 5 5

● 事務室から

法人化後3年目を迎える時期	事務長	千代進一	6
---------------	-----	------	---

● 図書室から

図書館員として働き始めて	図書掛	山本健太郎	6
--------------	-----	-------	---

● 臨床教育実践研究センターから

	臨床教育実践研究センター COE 助手	和田竜太	7
--	---------------------	------	---

● 助手室から

	心理臨床関連助手	川部哲也	7
--	----------	------	---

● 烏丸キャンパス

	比較教育政策学講座 教授	高見 茂	8
--	--------------	------	---

● 留学生から

	教育学講座博士後期課程3年	ユンスアン	8
--	---------------	-------	---

● 諸記録

①入試結果 ②学位授与件数 ③教育職員免許状取得状況 ④人事異動 ⑤招へい外国人学者等の記録 ⑥寄附金受入 ⑦受託研究受入 ⑧科学研究費補助金 ⑨総長ランチミーティング	9~11
---	------

● 諸報

新任教員、事務員紹介	12
------------	----

卷頭言

研究科長 学部長 川崎 良孝

■ 教育学研究科と国際学術交流

研究大学の研究が、文系であっても国際的なレベルが求められ、それに応じた学内での体制整備、教員の海外との結びつきと活動、さらに院生諸君の国際的活躍が必要なのは、あらためて説明の必要はないでしょう。

さいわいなことに、教育学研究科の先生方は、これまで個人あるいは講座レベルで、多くの国の一流の研究機関や研究者と交わってきました。教育学研究科としての国際的学術交流が求められていますが、必要なことはそれらを教育学研究科としての位置づけに引き上げるとともに、相手校との持続的な発展の可能性を慎重に見極め、学術協定を積極的に結んでいくことです。学術協定の締結自体は簡単ですが、持続的に発展させるということが最も重要なことと思っています。

今回、北京師範大学教育学院と学術協定を結びました。北京師範大学教育学院は中国の教育学系大学院では常に首位を保っている大学院です。本研究科からは教員10名、院生10名が参加し、学術協定調印式のうち、2日間にわたって教員シンポジウムと院生シンポジウムを開催しました。今回は一粒の種を蒔いたにすぎません。さらに先生方の交流、さらには両国の院生が次々と教員になり、赴任大学でさらに国際交流を持続・深化させ、点から線に、そして面になっていくことを期待しています。

現在、教育学研究科では、具体的に中国中央教育科学研究所、シェフィールド大学、ランカスター大学（以上、英国）、ベルリン自由大学などと、国際交流のあり方を検討しています。

以下は、2006年6月5日に、北京師範大学で行われた学術協定調印式で行った調印後の挨拶です。

■ 京都大学大学院教育学研究科と北京師範大学教育学院の学術協定調印式に際してのあいさつ

皆さんおはようございます。先ほど北京師範大学教育学院と京都大学大学院教育学研究科とは、相互の学術交流を促進するために、学術協定を締結しました。京都大学大学院教育学研究科長として、北京師範大学教育学院の張学院長ほか、同学院の先生方に心からお礼申し上げます。

教育学研究科は今までハーヴァード大学、カリフォルニア大学サンゼルス校、それにフランスのレンヌ大学と学術協定を結んできました。北京師範大学は4番目の協定校、アジアで最初の協定校になります。私は学術協定の締結自体は、たいして難しいことではないと考えています。難しいのは、学術協定の内容をど



のように広め、深め、そして展開していくかということです。そうした点で、北京師範大学とは充実した持続するパートナーであります。強く願っています。

その学術協定書には、いくつかの事業が書かれています。例えば、教員相互の交流、論文集の刊行、さらに刊行物の交換といったことです。これらは重要なことです。私からみていっそう重要なのは、今後を担う若い研究者や大学院生の研究上の交流であり、さらにはそうした若い研究者による共同研究といったことです。

これに関連して、今回、院生諸君のシンポジウムが開催されることは、私にとって大きな喜びであり、また今後も発展させていきたいと願っています。そして教員だけでなく、院生レベルでのネットワークが広がることを大いに期待しています。また、共同研究については、学力の問題、早期英語教育の問題、教育制度の問題など、実のある研究課題が多くあると思います。そうした課題について、フィールドに入り込んだ若い研究者の共同研究を期待しております。

京都大学は1897年に設立され、現在16の大学院、10の学部、13の研究所、19の研究センターを持っています。学部学生数13,000名、大学院生8,500名、留学生1,300名、外国人研究者（短期・長期）1,000名です。教員は3,000名、職員は2,500名を擁しています。また図書館・図書室は50以上で、蔵書冊数は700万冊近くになっています。

こうした京都大学は「自由の学風」を基本に、「地球社会との共生」を目指して、「研究・教育・社会活動・医療」を柱に、世界最高水準の研究拠点になるべく努力しています。

教育学研究科・教育学部は、学部生260名、大学院生200名、教員35名、職員23名という小さな研究科です。大きく、教育の基本を考える部門、教育心理学を研究する部門、それに教育と社会との関係を探求する部門に分かれています。教員を養成せず、教育学の研究をする大学院であり、学部です。また、中国をはじめ、東アジアと研究上の結びつきを持つ先生も多くおられます。

今朝、締結しました学術協定により、双方の大学を拠点にさらに学術交流が、とりわけ若い研究者の交流が広まっていくことを期待しています。それが私の大きな喜びでもあります。

京都大学大学院教育学研究科を代表しまして、今回の学術協定締結およびシンポジウムの開催にご尽力いただいた先生方にあらためてお礼申し上げるとともに、両校が今回の学術協定の締結により、ますます発展することを願っています。ありがとうございました。

研究ノート

○教員から

教育学講座 教授 辻 本 雅 史



教育史が専門分野です。教育史とは、歴史の研究手法によって、教育の諸課題に応えようとする学問。わたしの場合、江戸時代の思想や教育を対象としています。教育の諸課題を考えるのに、なぜ古くさい江戸時代を研究するのか、よく問われます。

これに対して、わたしは2つの視点で応えることにしています。一つは、江戸期は、今につながる日本の生活や文化の様式が成立した時期。読み書きが庶民に広がり、出版文化が行きわたったのも、この時代でした。子どもが文字を学ぶのが当たり前になり、庶民が出版された本を手にして勉強し始めた時代なのです。いずれも史上初めての現象。文字と出版を前提にして、子どもの教育があったという点で、江戸時代は近代社会と変わるところがありません。文字や出版のメディアから教育を考えるために、その起点の江戸時代から考える必要があるのです。

二つには、それにもかかわらず、江戸時代は封建制社会。近代の「外部」です。江戸時代にタイムスリップして（歴史学は学問的手続きをやってタイムスリップできます）、江戸時代の側から近代の教育を眺めて見る。すると、近代では当たり前の学校が意外といつて見えます。つまり近代の外部から、今の教育を批判する視座が確保できるのです。

江戸の側から見たとき、今の子どもを取り巻く文化（おもに商業主義の電子メディア）にも目がいってしまいます。メディア環境のあり方が、子どもの内部を規定しているのを否定できません。いまわたしは、教育を「知の伝達」とみなし、そのメディアに焦点化した「教育のメディア史」研究に取り組んでいるところです。学校も知の伝達メディアに他なりません。学校以前には、子どももおとなも、多様なメディアを通じて、知（情報）を得て人間形成を果たしていたのです。

20世紀は紛れもなく学校の世紀でした。その教育のメディアは学校でした。21世紀が生涯学習社会の世紀であるとすれば、教育のメディアは学校とは限りません。これから教育のあり方を考えるためにも、教育のメディア史という歴史研究は、エキサイティングな主題なのです。貝原益軒や石門心学は、読み方によっては今の最先端の知識人たりうるのです。教育史をメディアの視点から書き直す、これがいまめざしているところです。

院生から○



生涯教育講座 修士課程1年

赤 上 裕 幸

教育学の中のメディア論

私はメディアの中に存在する二項対立に大きな関心を持っています。特に戦後繰り返されてきた、被害者を名乗るメディアに、加害（戦争に加担していたこと）に対する反省を求める、という構図に疑問を抱いてきました。そこには、国民のニーズを背景とした総動員体制にメディアが支えられていたという事実が欠けてしまっています。

卒論では、「ひめゆりの塔」（1953年）や「二十四の瞳」（1954年）といった戦後反戦映画の分析を行いました。こうした反戦映画は、GHQの日本占領がちょうど終わる頃に、国民の人気を集めたわけですが、一方では戦争や軍部に対する被害者意識を見てることができます。さらに注目すべきは、戦意高揚映画が多数作られ戦争に邁進していく戦中と、反戦映画が多数作られ平和国家建設に邁進していく戦後とがあまりに酷似していることです。確かにイデオロギーは変わったのかもしれません、「総動員体制」は戦後も継続していたと言えるのではないでしょうか。

ともかくも、単純な二項対立はその背後にあるものをしばしば隠蔽してしまいます。現在でも、雑誌の「正論」や「諸君」を読む人は「週刊金曜日」や「世界」を読まないといわれます（その逆もまた然り）。さらにはメディアの発達により、情報が二元化して正義か悪かといったわかりやすい議論が横行してしまっています。しかし、だからこそメディア分析が必要であるし、またこうした問題はメディアに限ったことではないはずです。教育学の中にメディア論が存在することの意味もあると思います。

C院 生 か ら

臨床教育学専攻 M1 大石 真吾



大学院入学当初は、部屋の場所も使い方もよくわからない、毎日何をするのかも分からぬ、院生の顔もよく分からない、そんな状態でした。そこから少しずつ院生の名前と顔を覚えはじめ、現在では顔を見れば院生かどうかだいたい判断できるようになってきました。生活リズムもつかめるようになりました。ただ時折見覚えのない方が院生と知られ、大学院という組織の底知れなさを感じます。まだまだわからぬことだらけの中でようやく足場を築けるようになってきたというのが現状です。

私の入学した心理臨床学講座は、心理臨床の研究機関であると共に、臨床家の養成機関でもあるという特徴を持っています。それはカリキュラムにも反映され、文献を扱う授業から臨床実践を想定した授業まで様々なものがあります。実際のケースに触れる機会もあります。学部生時代、クライエントのプライバシー保護の観点から、実践とは遠い、いわば机上の世界で学ぶことを余儀なくされていた私にとって、こうしたカリキュラムは実践の場の息づかいを感じることのできる貴重な場となっています。そしてそれと同時に、一人の人間と向かい合うという営みの持つ重み、あるいはそうした営みについて学ぶことの責任というものをひしひしと感じさせられる場ともなっています。

こうした状況下、いかに臨床家・研究者としての自分のあり方を見いだしてゆくのか、暗中模索の日々は始まったばかりです。

社 会 人 院 生 か ら



「楽しい京大」私論

教育方法学講座 専修コース
修士課程2回生

森 脇 逸 朗

京都市の小学校に勤務する傍ら京都大学に通っています。これまで、とりわけ体育科の指導方法について「楽しい体育」論という理論をもとに実践を続けてきました。これは、子どもの側から学習の魅力(楽しさ)を捉え、生涯にわたる自発的な学習(運動)の実践者を育てようとするのですが、昨今さまざまな教育問題が取りざたされる中、教育のかなり広い範囲にこの理論が応用できるのではないかと考えてきました。今回京都大学で学ぶ機会を得たことで、これまでの実践を整理して自ら問い合わせすこと、さまざまな講義を受講して最新の理論を初心に帰って学びなおすことの2つを大きな目標にしています。

吉田山に登ると東山の山々が間近に見えます。そのふもとの高

校に通っていた私にとって「京都大学」は憧れでした。今は亡き恩師を偲びつつ、念願の大学で“学生”に戻って1年余りが過ぎましたが、出会った講義は期待以上のもので、慣れない英語などに苦しみながらも知的な刺激を享受し、わくわくするほど楽しく過ごしています。また、他の学生たちの授業・研究に取り組むその真摯な姿に接すると、今度は立場を教育に携わる一人に変えて、「ここに、こんなに真剣に教育を考える人たちがいるぞ!」と学校現場の教師仲間に伝えたい衝動に駆られるほど大変うれしく思います。

午前中は職場で授業を行い午後から大学へ。鴨川べりを自転車で走ると教師モードから学生モードへの変換です。よく「働きながら、大変ですね。」と声をかけていただきますが、指名されて研修しているわけではなく、まったく苦労だとは感じていません。学んだことを即実践できるフィールドがあるわけで、強がりでなく、むしろ「楽しい」・「うれしい」の連続です。ライトアップされた時計台の下を家路につくときなどは大変充実した気分になっています。「楽しい体育」論の真髄でもある「学ぶ」ことは「楽しさ」であるということを自ら実感している毎日です。

学部生から



現代教育基礎学系
4回生

山田 修 裕

春は出会いの季節、と言われます。私にとっても、今年の春は出会い多き春でした。その多くの出会いの中でも特に印象深かったのが、ある言葉との「出会い」です。

先日、とあるシンポジウムに行ったときのことです。そこにパネリストとしていらっしゃっていた茶道裏千家家元の千宗室氏が、一澤帆布という東山にある鞆屋の話をしながら、

「職人技」ということについて、こう語られました。「職人とは、一手間かける、ということを知っている人のことです。漠然と物をつくるのではなく、素材を生かし、使う人のことを思い、一手間かけることができる。そして、それが多くの人をひきつけるのです。」

「一手間かける」。この言葉は、今は亡き祖母が、幼少の頃の私にいつも語りかけてくれた言葉でもあります。シンポジウムが行われた日は、その祖母の命日でもありました。そんな日に語られたこの言葉に、私は不思議な縁、「出会い」を感じたのでした。

来年の春からは、私は書くことを仕事として生きていくことになります。書くことにおいて「一手間かけることができる」職人になれるよう、精進していきたいと思います。そして、その試金石になるであろう卒論の作成に向けて、動き始めている今日この頃です。



教育心理学系
4回生

永山 智之

私は今、「集団における俯瞰と自己」をテーマに生涯初の論文作成にあたっているところです。

我々は時に、2人きりで話すということと3者以上の集団で話をすることを違った感覚で捉えます。例えば友人と2人で話

しているところに第3者が入ってきたときを想像してみてください。「ぱっとチャンネルが切り替わるような」感覚が自分の中に生じるのを意識できはしないでしょうか。すなわち、自他の関係性だけでなく、他者同士の関係性を考慮したコミュニケーションへの意識の切り替えをです。さらには、その際に、自身や状況を俯瞰する、自身のもうひとつの視点に気づきはしないでしょうか。

決して容易なことではないとは思いますが、私はこのような感覚や視点を卒業論文で描き出していきたいと考えています。そして、出来得ることならば、臨床場面における2者関係・集団関係へと還元していくような研究にしたいと思います。



相関教育システム論系
3回生

田中 淳也

京都大学教育学部に入学して早三年目。ニュースレターの執筆にあたることとなり、私がこの二年間で感じた教育学部の姿について、ここで書きたいと思います。

私はこの教育学部に「家族」のようなイメージを抱いています。まず、教育学部に入学すると、同回生というヨコのつながりができます。ひとりひとり、個性豊かな人が60人強集

まる中で、周りから受ける影響は非常に大きいものがあります。加えて、タテのつながりとして、先輩、後輩との交友が生まれてきます。同回生とは違った縦のつながりは、さらには教員の方々にまで、広がっていきます。大変教育熱心な方が多く、勉強面で指導・助言等をして下さります。事務の方、教育学部図書館の司書の方などを含め、様々な年齢層の人間が密に関わっているのが、京都大学教育学部に対する私の印象です。

このような教育学部の「家族」という印象は、他学部あるいは他大学にはないようなものであると、私はこの2年間で感じました。所属する講座も決まり、今までとはまた違う緊張感に包まれたゼミに身をおく中で、自分の勉強不足を痛感する毎日ですが、この恵まれた環境で、充実した生活を送っていきたいと思います。

法人化後3年目を迎える時期

事務長 千代進一

国立大学法人となって3年目を迎え、第1期中期目標・中期計画の中間点に差し掛かる時期となりました。法人化に伴い、新たに効率化係数が課され、その状況下で、本学の教育研究、医療に対する支援の強化と教員や学生に対するサービスの向上を図りつつ、法人化が目指す自主的・自律的な大学運営を実現するためには、事務改革が不可欠なものであるとして、昨年5月「事務改革大綱」が制定されました。

事務改革大綱では、事務改革を達成するための具体的方策として、①事務量の削減及び事務処理の効率化の促進、②事務組織の再編成・整備、③事務職員の再配置の3つの事項を掲げ、鋭意、検討されてきました。

事務組織の再編成・整備については、昨年11月に事務本部を教育研究推進本部、及び経営企画本部に分離、本年4月には新たに11の事務センターが設置され、専門的な業務を推進することになりました。しかし、事務本部組織の再編成・整備は一応行われましたが、その実質化のための具体的な取組を進めるため、事務改革WGが設置され、7月までにマスタープランを策定することになっております。

一方、事務量の削減、事務処理の効率化については、鋭意、見直しが行われております。法人化に伴い、リスク管理とそれに要

するコスト管理とのバランスを考慮しなければならないのですが、大学の運営費交付金をはじめ、科学研究費補助金等の競争的資金の大半は税金で賄われており、透明性、経済性、公平性を確保する必要があります。また、社会に対し説明責任を果たさなければなりません。懸案であつた旅費法・旅費規則が、全面改正され、7月に施行されることになりました。従来、詳細に法・規則等で規定されていましたが、教職員の自己責任に負うところが大きくなります。しかし、運用によっては事務担当者にとっては、処理が煩雑になるので省力化に向けて検討しているところです。

このような状況ではありますが、本研究科事務部としましては、教員の方々への的確・迅速な情報提供及び競争的資金等の事務支援体制の充実、学生の方々への窓口サービスの改善、充実に取り組んでまいります。限られた「ヒト・カネ・スペース」の下で、皆様のご要望にどこまで応じられるのかわかりませんが、忌憚のないご意見、ご要望を事務部へ寄せていただきたいと考えております。どうぞよろしくお願いします。



図書館員として働き始めて

図書掛 山本健太郎

早いもので、京都大学教育学研究科の図書館で働き始めて約10ヶ月が経ちました。小さい頃から本が好きでしたが、まさか図書館で働くことになるとは今でも信じられない気持です。本が好きで、というよりは図書館のもつ雰囲気が好きで今ここにいるのだと思います。図書館に一步足を踏み入れるとそこは独特的の空気が流れていてその静寂の中で真剣に本を探していると、その匂いというか、なんともいえない心地よさを感じます。こちらで働きはじめた頃は本を配架しながら書棚を眺めては興味のある本を見つけて嬉しくなっていました。

教育学部の図書室は小さいながらもとても素敵な図書館です。一階に参考図書と新刊の雑誌を配置しています。閲覧用の12人分の机と椅子があります。文献探索用の端末が三台あり、これらは今年の4月に旧型の大きい画面から新しくすっきりした薄型に変わりました。学生の方々には、なかなか好評です。西側窓際に新しい書架も作りました。地下の書棚には本がぎっしり配置されています。本が大変窮屈そうに見えるのは私だけではないと思います。

利用者として図書館を利用していた時は、私一人で図書館と対峙していました。司書の方はどこか近寄りがたく、こちらの知識の無さを気にしたり、これくらいのことは自分で調べられるこ

とではないかと考えてしまったりして、なかなか質問できませんでした。今思えば学生時代は文献探索法を知らなかったのではないかと思います。その点、教育学部の学生さんは幸運です。福井さんが親切丁寧に文献探索法を教えてくれるのですから。学生の方や先生方からも福井さんならなんとかしてくれるのではないかと頼られています。福井さんがいない時は残念そうに帰っていかれます。そんなときは大変申し訳なく思います。利用者の方の探している資料を、一緒に探すということで利用者の方だけでなく図書館員も相互に成長できると思うのです。質問に答えられない場合はどうしようと、背中に冷や汗をかきながらではありますか精一杯お手伝いさせて頂きます。機嫌の悪そうな顔をしていても決してそうではありませんので、どうか気軽に声をかけてみてください。学生の皆さんのがんばんだんと覚えてきました。まだまだ駆け出しの図書館員ですが図書掛の皆の親切な指導に支えられ日々成長していきたいと思っています。

これからもどうぞよろしくお願いします。



臨床教育実践研究センターから



臨床教育実践研究センター
COE助手
和田竜太

臨床教育実践研究センターは社会に開かれた機関として、学外一般の方を対象とした相談窓口である心理教育相談室での活動を基盤にしながら、外国人客員教授による公開講座や、学校教育現場に従事している教師や専門家のためのリカレント教育講座など、市民一般や専門家等、様々な方を対象に幅広い活動を継続して行っています。

当センターの活動の大きな柱として、「教育」と「研修」が挙げられます。教育に関する活動の一つとして、当センターでは心理臨床家養成課程に在籍する大学院生向けに「教育心理臨床学演習」という授業を開講しております。これはいわゆる教育実習とは異なる「臨床的観察実習」を教育現場で実施するもので、児童と直接関与観察的にふれあう中で体験的に学んでいくことを目指しています。教育実習生とは異なり、よりあいまいな立場として学校現場に入っていくため、学校内における自身の立場やあり方に迷い、時にしんどい思いをすることがある中で、個々の実習生がまさに試行錯誤しながらそれぞれのあり方を模索していく過程は、心理臨床の第一歩を踏み出す大学院生にとって非常に

大きな体験となっています。また、この実習は選択授業でありながら、毎年多くの大学院生（特に修士課程1回生）が参加しており、定期的に行われるミーティングでは個々の振り返りを通して自身の学校現場でのあり方を見つめ直し、再び学校現場に入していくエネルギーを得ているように感じられます。この実習は京都府総合教育センターや各学校と連携・協力しながらの活動であり、学外機関や学校現場との連携という意味でも当センターの重要な事業となっております。

また、研修に関する活動として、現役の学校教員やスクールカウンセラー（心理士）を対象とし、個々の事例に即しながら、学校における諸問題について考える「教育心理臨床実践学演習」という授業を開講しております。いじめや不登校を中心に様々な問題が学校現場で起こっている現状の中で、その最前線にいる教師やスクールカウンセラーが一つ一つの問題に対してどのように対処していくかについて、この実習ではグループでの検討を行っております。教師とスクールカウンセラーがともに個々の事例を検討することで、幅広い視野から具体的な問題を見つめる研修の場となっております。受講生は科目等履修生として年度末に広く募集しており、毎年熱心な方々に受講していただいております。

このように当センターは学校現場や医療現場等、様々な現場や機関、関係者と連携・協力しながら活動を行っております。そうした現場と直にかかわる中で、センタースタッフ一同研鑽を深めていきたいと思っております。今後とも当センターの活動にご支援賜りますようお願い申し上げます。

助手室から



さまざまな視点からものごとを眺めることの大切さ

教育学研究科
心理臨床関連助手
川部哲也

この4月から心理臨床関連助手として助手室にいます。なかなか慌しい毎日ですが、助手室の椅子に座りながら今日は心理学について考えを巡らせました。

いつもまず頭に浮かぶことは「さまざまな視点をもつことの大切さ」です。大学院生時代にこんな調査をしたことがあります。風邪をひいた体験を想起してもらって、「なぜ、その時に風邪をひいたのか」という質問をしました。すると調査参加者の答えは、①外的要因（寒かった、誰かにうつされたなど）、②身体的要因（寝不足だった、栄養のバランスが悪かったなど）、③油断要因（寒い

のに薄着ていた、手洗いうがいを怠ったなど）、④精神的要因（悩み事があった、ショックな出来事があったなど）、⑤超自然的要因（神様がくれた休日など）の5つに大別されました。風邪ひとつをとっても、これほどたくさんの捉え方・視点を持つことができるに驚かされました。そして、世の中のあらゆる現象についても同様に、たくさんの捉え方・視点を持つことが可能なのではないかと思います。

一見「悪いこと」の裏にも、視点を変えてみると「いいこと」が隠れているかもしれません。日々の中で少しんどくなった時には、「他の視点はないか」と探してみるのも面白いでしょう。一人で考えるのに行き詰った時には、誰かに話を聞いてもらうのもいい方法でしょう。考えを言葉にすることで、整理され、また新しい視点がそこから生まれるかもしれないからです。晴れた日の昼下がり、助手室でこんなことを考えながら過ごしています。



烏丸キャンパス

比較教育政策学講座 教授 高見 茂

本研究科では、平成10年度からの大学院重点化以降、大学院生の増加、社会人院生の受け入れ等により、教育研究条件としての教室・演習室の確保が厳しい状況が続いている。かかる状況の中、平成17年度「魅力ある大学院教育」イニシアティブのプロジェクトが採択さ

れたことに伴い、理論・実践融合型の教育学の新分野開拓のため教育研究条件整備は不可欠となった。プロジェクトでは遠隔教育システムを導入した提携外国大学との同期型授業の展開、外国研究者とのテレビ会議、院生主体の研究開発コロキアム等の新機軸の展開が柱の一つとして予定されていた。しかし手狭な教育学研究科本館内でプロジェクト推進のための新たな施設を用意することは叶わず、学外を含む外部に新たな施設を求めることが成了。

幸い関係各方面のご協力により、平成18年1月に下京区五条通の地下鉄五条駅前（京都市下京区五条通烏丸西入醍醐町284、YMC烏丸五条ビル7階）に烏丸キャンパスを整備することができた。総床面積81.64平米、定員24名

8F	株式会社 フィジオン 株式会社ワイエムシィ (会議室)
7F	京都大学大学院教育学研究科 烏丸キャンパス
6F	株式会社 ほんもの総合研究所

の講義室と教材作成や授業収録可能なスタジオからなり、遠隔教育システム、視聴覚教育設備も整えられている。キャンパスは南向きの7階に位置し、そこからの眺望も申し分ない。場所的にも交通至便であることから、イニシアティブ関係の教育研究に限らず、通常授業、研究会、会議等についても十分利用可能である。また今後の本研究科の社会貢献の拠点としての新たな役割も期待されている。

留学生から



京都で英語教育を学ぶ韓国人の私

教育学講座
博士後期課程3年
ユンスアン

私は、日本近代の英語教育界のリーダーだった岡倉由三郎（1868～1936）を中心として、英語教育と帝国主義のかかわりについて勉強している。でも、当初から英語教育の政治性に関心があつた訳ではない。むしろ韓国での大学生時代は、そのような問題意識をあらわにする友人たちをあざ笑っていた程である。私が大学へ入った当時の韓国は、アメリカのパックアップのもとで軍事クーデターにより権力を握った全斗煥が大統領であった。「アメリカ帝国主義は立ち去れ!」という掛け声のもとで、毎日のように学校ではデモが起っていた。しかし、大学で英語教育を専攻していた私には、授業時間にこのような社会問題に言及する先

生も、デモに参加する同級生も一人もいなかった。我々には英語ができるという自負心と就職率100%というバラ色の将来があつたからだ。大学卒業後は、高校で英語を教えた。学生たちから「先生は本当にこわい」という話を何回も聞いた。その時、どうして私がこわい先生と言われるのか全く分からなかつた。当時の私は自分の夢を実現させるための大切な手段である英語を熱心に教え、勉強しない学生を意志薄弱と考えていた。

韓国で英語を「成功」の手段として学び、教えていた自分に対する違和感、アメリカに象徴される英語が切り開く世界への憧れと、その一方で白人優越主義を感じさせる英米文化への嫌悪感、それが私を英語教育の歴史的検討に向かわせる。日本に留学してからは、西洋を模倣しようとした日本人の中に根強く残る帝国主義的な感性に対する怒りも、私の研究の動機となっている。このような研究を通して、私の英語教師としての自己形成の過程も顧みたいと考えている。

諸記録

◆平成18年度入試結果

・教育学部

日程等	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
前期日程	40	164	158	41	62
後期日程	20	174	92	22	
第3年次編入学	10	37	37	10	

・教育学研究科

課程等	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
修士課程	研究者養成コース 教育科学専攻	18	42(1)	40(1)	18
	臨床教育学専攻	14	73	68	15
	教育科学専攻(専修コース)	10	26	26	10
	臨床教育学専攻(第2種)	若干名	7	7	0
博士後期課程編入学	若干名	9	9	4	4
臨床実践指導者養成コース	4	9	9	4	4

()内の数は外国人留学生で内数

◆平成17年度学位授与件数

(H18.3.31現在)

学位名等		授与者数
学士	教育科学科	68
修士	教育科学専攻	27
	臨床教育学専攻	14
博士	課程博士	12
	論文博士	2

◆教育職員免許状取得状況

平成17年度(2005)

中学校専修免許状	
中学校1種免許状	2
高等学校専修免許状	1
高等学校1種免許状	8
養護学校1種免許状	
養護学校2種免許状	

◆人事異動 (H17.10.02～H18.04.01)

平成17年10月1日付け（※前号掲載漏れ）

前平 泰志 教授 副研究科長

(任期 17.10.01～19.03.31)

子安 増生 教授 副研究科長

(任期 17.10.01～19.03.31)

平成17年12月1日付け

小野 文生 助手

(イニシアティブ関連)採用

柴本 枝美 助手

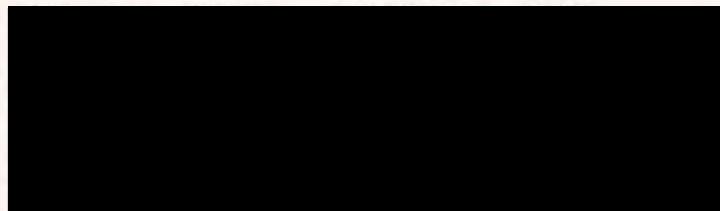
(イニシアティブ関連)採用

平成18年3月31日付け

石原 宏 助手(心理臨床関連) 辞職

平成18年4月1日付け

山田 洋子 教授	現代教育基礎学系長 (任期 18.04.01～19.03.31)
伊藤 良子 教授	教育心理学系長 (任期 18.04.01～19.03.31)
稻垣 恭子 教授	相関教育システム論系長 (任期 18.04.01～19.03.31)
田中 康裕 助教授	心理臨床学講座 採用 (大正大学人間学部助教授より)
川部 哲也 助手	(心理臨床関連) 採用



◆ 招へい外国人研究者等の記録

招へい外国人学者

○ 氏 名	Manalo,Emmanuel (マナロ エマニュエル)
現 職	オークランド大学スチューデント・ラーニングセンター 所長
活動内容	大学生の進学動機に関する心理学的研究
受入講座	教育認知心理学講座
受入教員	子安 増生 教授
受入期間	17. 8. 8 ~ 18. 7. 4(※再掲 受入期間の変更)

外国人共同研究者

○ 氏 名	林永勝 (リンエイショウ)
現 職	清華大学文学部 兼任講師
活動内容	「気」の思想と儒学の修養思想の日中比較研究
受入講座	教育学講座
受入教員	辻本 雅史 教授
受入期間	18. 4. 1 ~ 19. 3. 31

◆ 寄附金受入

寄附金の名称	寄 附 目 的	寄 附 者	研究担当者
日本の大学教育の現状と課題	日本の大学教育の現状と課題	財団法人 京都大学教育研究振興財団	川崎良孝

◆ 受託研究受入

寄付委託者	研 究 題 目	研究担当者
独立行政法人 教員研修センター	教員研修モデルプログラムの開発	西岡加名恵

◆ 科学研究費補助金

18年度

研究種目	研究題目	研究担当者
基盤B一般	フィールドの語りをとらえる質的心理学の研究法と教育法	山田 洋子
〃	民間資金活用による教育財源調達手法の有効性に関する国際比較研究	高見 茂
〃	「専門的教養知」の働きとその教育・養成に関する文理総合型研究	藤原 勝紀
〃	知の伝達メディアの歴史研究—教育史認識のメディア論的転回に向けて—	辻本 雅史
〃	大学批判の歴史社会学—知識人的公共圏の成立と変容	稻垣 恭子
〃	社会的相互作用における感情・意図理解の心理・神経基盤	吉川左紀子
〃	「心の理論」の獲得と実行機能の伝達	子安 増生
〃	批判的思考の認知的基礎と教育実践	楠見 孝
〃	「伝承・習い事」文化における学習様式と生涯学習の現代的課題に関する比較研究	渡邊 洋子
〃	近代日本の植民地経験とアイデンティティ形成に関する比較教育文化史的研究	駒込 武
〃	義務教育の機能変容と弾力化に関する国際比較研究	杉本 均
基盤C一般	言語産出と作動記憶を支えるタイミング制御機構の解明	齊藤 智
〃	学力向上をめざす評価規準と評価方法の開発	田中 耕治
〃	アメリカ公立図書館の基本的性格をめぐる裁判事例の総合的研究	川崎 良孝
〃	世界市民性と教育哲学の再構築：デューイ、カベルの民主主義批判哲学からのアプローチ	齋藤 直子
〃	贈与と交換の教育人間学的研究	矢野 智司
〃	ドイツにおける大学改革支援団体による高等教育政策の推進メカニズムに関する研究	金子 勉
〃	放送メディア教育の成立と展開	佐藤 卓巳
〃	ポスト・フォーディズム時代における教育機会とライフコースの変動に関する比較研究	岩井 八郎
萌 芽	仮想空間を利用したコミュニケーション・システムの認知的評価と応用	楠見 孝
〃	地域通貨の生涯学習論的研究	前平 泰志
〃	「たしなみ」型教養の歴史社会学的研究	稻垣 恭子
若手B	箱庭制作過程における身体感覚およびイメージの体験に関する研究	和田 竜太
〃	カリキュラム評価に生きるスタンダードの設定に関する国際比較調査	西岡加名恵

◆ 総長ランチミーティング

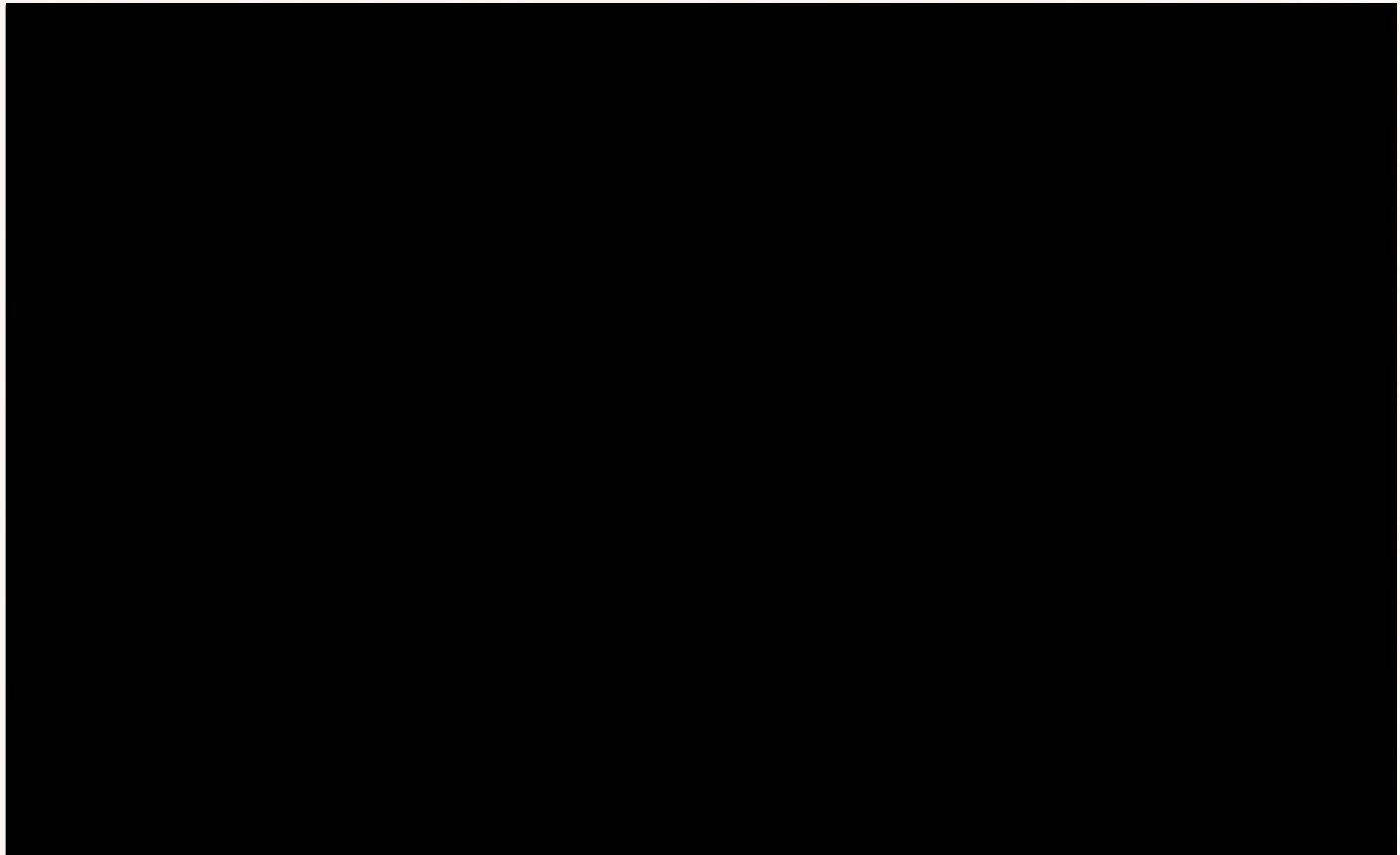


尾池 和夫 総長、松本 紘 理事（研究担当）等が昼食時間を利用して部局を訪問し、部局の若手研究者等と、フリートークの形で意見交換を行う第7回目の「総長ランチミーティング」が、5月24日（水）に教育学研究科で開催され、川崎研究科長同席のもと、本研究科からは若手助教授、助手が7名出席し総数21名で行われました。

懇談では、オーバードクターへの支援、国際交流教育（語学教育）支援、助手の定員（若手のポスト充実）問題、スタートアップ研究費、競争的資金獲得のための支援スタッフについてなど研究を取り巻く様々な問題に対する要望のほか、学生と教員との関わり具合など、教育現場の問題にも踏み込んでのさまざまな意見交換が行なわれました。

諸 報

◆新任教員・事務員紹介（「」内は本人の抱負）



～編集後記～

ニュースレター第12号をお届けします。今年度に入って、「魅力ある大学院教育」イニシアティブに関連するプロジェクトなども本格的に動き出し、研究科も忙しくなっています。今号では、6月に行なわれた北京師範大学との学術交流協定調印式での研究科長のご挨拶や、整備された鳥丸キャンパスの様子など、その一端についてもご紹介しています。研究科で取り組んでいる事業やイベントなども多くなっていますので、ニュースレターでもできるだけ紹介し、情報交換と相互理解に役立てていけるよう工夫したいと思っています。紙面に関するご意見やご提案、ご助言など、ぜひよろしくお願ひいたします。

また、今号から表紙デザインが新しくなりました。前号までと同じく山田旬子さんにデザインしていただきました。写真の花は、教育学部図書室の裏手に咲いていた「アガパンサス」、花言葉は「知的な装い」だそうです。

最後になりましたが、原稿執筆をお引き受けいただいた方々や、資料をご提供いただいた事務職員の方々には、お忙しいなかをありがとうございました。厚くお礼申し上げます。（K・I記）



京都大学教育学研究科 ・教育学部広報委員会

委員長 稲垣 恭子 教授(教育社会学講座)

委員 川崎 良孝 教授(教育学研究科長・教育学部長)

委員 鈴木 晶子 教授(教育学講座)

委員 角野 善宏 助教授(附属臨床教育実践研究センター)

委員 千代 進一 事務長

委員 新堂 利博 総務掛長

委員 前田 勝 教務掛長

事務担当

教育学研究科・教育学部総務掛
TEL 075(753)3003

表紙デザイン 山田旬子